

## 人の生きかたと仏の教え

お釈迦さまが悟りを開かれたのは「諸行無常」という問いかけから始まっていることは有名な話です。人生は、いや、すべて生きとし生けるものは無常なのです。生命のないものは滅びません。滅びるから、生命があるのです。それも、滅びるべくして滅びるのではなく、滅びるはずのない（と思っている）ものが、突如としてピリオドを打たれることが、実際に起り得るのです。

それが、人生です。仏教は、いわゆる運命論ではありません。これこれの運命があったから、こうなったのだとは、説きません。運命論は、運命を決める絶対者を必要とします。例えて言えば、仏が、そのことをとり決めるのです。人は、そのとり決めに従って、生きなければ仕方がないのでしょうか。そうではありません。人の生きかたは、仏さえ支配できないものなのです。仏すらどうすることもできないもの、それを仏教では「業」という言葉でいいあらわしています。人は、さまざまな業を背負って生き、業のおもむくままに、死んでゆくというのは、一見、運命論に見まがわれそうですが、そうではありません。この業を貫いているのは、因果の道理です。原因があって、結果があるという、そのプロセスのなかに「縁」というはたらきがあります。因縁です。この因縁によって人は動かされてゆきます。

残酷な話ですが、例えば、女の子が交通事故に遭ってしまいました。たまたま、何かの理由で道を急いでいて、急いでいるから、押ボタンの信号が変わると同時に駆け出してしまいました。「因」です。そこへ、通りかかったドライバーの瞬間の判断があります。今なら突っ切れると、黄信号を認めながらスピードをあげます。「縁」です。この縁にも「因」があります。ドライバーは交通渋滞に苛々していました。早く仕事を片付けたいと思っていました。そういう原因があって、交通事故という、もつとも不幸な出会いとなります。この瞬間の出会いが、それこそ一瞬の間でも食い違っていたら、女の子は命を落さなくてもよかったです。ことわっておきますが、ここは、何事も「因縁」とあきらめよ、と語られているわけではありません。あきらめとは「諦」という字が当てられます。仏教でいう「諦観」です。「あきらかに見る」と訓みます。諦とは、思いきりよくあきらめたという思念の停止ではなく、あきらかに観るという思念の進行です。そういう、きびしい人生を、ありのままに、直視するところから出発しなければなりません。

## お盆の準備



仏教をまなぶというのは「転迷開悟」の道だといえます。迷とは、右にするか左にするかという、そういう選択の世界ではありません。右も左も、なにも見えない世界が「迷」です。ありふれた言葉ですが、一寸先はわからないといえます。人生、その通りなのです。その通りの「迷」の世界を転じて「悟」をひらくということは、迷いを迷いとして放棄してしまうのではなく、迷いは迷いのままに悟りに変わるのです。人間、生きていくかぎり、その世界はあくまでも迷いでありのままの姿を、まっすぐにみるのが、仏教に入る出発点です。

ありのまま、といっても人間なかなかそのとおりにはできないではありません。幼児を亡くした母親が、お釈迦さまの神通力で、その子の生命をかせいでほしいと乞うたところ、お釈迦さまは、自分に血のつながったものを一人も亡くしてないという家から一粒のケシの実をもらってこいといわれたという話が、いまさらのように思い出されます。「死」という現実と、かわりなしに生きていく人間は一人もいないのです。そのありのままの姿を見直して「転迷開悟」の道に入る道場がお寺であり、仏事は、その得難い機会です。この機会にこそ、仏教の真実に触れたいものです。

仏教の道に入るには、いろいろの道筋があります。人生の問題に深刻に対決している人も居れば、忙しい現実に追われて、時としてお寺や仏像や、仏教の話に安らぎを求める人もあることでしょう。お寺の活動はこれらの人々に、幅広く門戸が開かれています。例えば、お寺の行事に楽しんで参加するのも、仏教に入る手だて（方便）です。仏縁といえます。何事も仏縁です。楽しい行事に心安めるのも一つの方便といえるでしょう。

## 空海の言葉 シリーズ

### 四生の盲者は、

●●●●四種類生まれ方をした生物で、もともと目が見えない姿で生まれてきた生物は、自分が盲者であることを知らない。

昔の人は、生物の誕生について、上手に分類しています。およそ生物の生まれ方には四種類ある、というのです。

一つは、「胎生」といって人間や動物のように、母親のおなかの中で、親と同じ格好になるまで育ち、それから生まれてきます。二つ目は「卵生」といって、母親のお腹から一旦卵として生まれ、それから再び孵化するという、生まれ方です。三つ目は「溼生」といって、カビやバクテリアのように湿ってじじめした所から、自然発生してくる生まれ方です。四つ目は、「化生」といって、最初は蝶のように卵として生まれ、次に孵化してササギとなり、最後は蝶になる、というお化けのような生まれ方です。

どんな生まれ方をしても縁あってこの世に生まれてくるのです。もし、生まれた時から失明していたらどうでしょう。と心配するのは、この世が色のついている世界だと知っている人だけです。深海魚たちは、海天井には色のついた世界があるなんて、思ってもいないのです。きつと「世の中とはこんなものだ」と気楽な一生を過ごしていることでしょうか。

もしかすると、私たちがこの世と考えている世の中が、深海魚たちの考えている世の中と同じじゃないだろうか？  
こんなことを考えさせるために弘法さんは、「自分が失明していることを知らない失明者」のたとえで、私たちが語りかけているの、うか！

